彼と彼女に祝福を

ルウさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼と彼女に祝福を

【Ｎコード】
Ｎ１６４２ＢＡ

【作者名】
ルウさん

【あらすじ】
ある晴れの日の朝、ハラグロ完璧高校生の上代相馬は知らない少女に助けを求められた。その後、面倒事に巻き込まれ、巻き込まれ、巻き込まれ……「このままでは生活が危ないっ」と悟った彼は私生活を守る為に奮闘する。

一話　：　出会い頭の急展開

「っっ、クソっ、どこまで追いかけてくんだよっ」

都会の喧騒から少し離れた所にあるとある町にて。

ダダダダダダ

荒っぽい足音がまだ静かな町にこだまする。

現在時刻午前６時５２分２３秒、上代相馬は朝の静謐な空気を切り裂きながら全力で走っていた。

よし、状況を整理しよう。

腕の中には可愛げな一人の少女、後ろには見るからにお近づきになりたくない成人男性が五人程。

要するに追いかけられている。

かれこれ３０分以上走っている上、人を一人抱えていることも相俟って息切れが激しい。こちらの体力はもうそろそろ限界だ。

その証拠に全身から汗が噴出し、袖のないきわめて吸水性の高いＴシャツには一目見ればわかるほど汗が滲んでいる。

体は熱く、足は今にも崩れそうだ。

以上の状況を冷静に分析すると、もういっそ止まってしまおうか、そしておそらく自分が追いかけられている原因であろう腕の中の少女を後ろの集団に渡してしまおうか、そんな思考が相馬の脳裏をよぎる。

だが腕の中の少女に目をやると、そんな考えはすぐにに吹き飛んだ。

身長１５０ｃｍくらいの小さな体に細い手足、ぱっちりとした目が可愛らしく、とても子供っぽい雰囲気を醸し出していて相馬の保

護欲は大いにくすぐられた。
昔妹が言っていた言葉を借りると、『可愛いは正義、それだけで全てが許される』という事だろう。

「つっても……」

手詰まりだ。
こちらは疲労が激しい上に、追っ手は五人。
このまま逃げ切るのは至難の技だろう。
なんたって相馬は平凡な一介の高校生なのだ。
異世界に飛ばされたこともなければ、別段体力があるわけでもない。
好きな女の子や友達のことで悩み、毎日部活に明け暮れるいたって平凡な高校生だったはずなのだ。
……では何がいけなかったのか、相馬は途切れかける意識の中で今朝の事を思い出すのだった。。

＊＊＊

上代相馬は筋金入りのハラグロである。
頭脳明晰で容姿端麗、テストでは学年1位を逃した事は無い、その上人当たりもよくいつもにこやかとしていて面倒見もいい。
しかし決して驕らず努力を欠かさない男子の目標、女子の憧れを体現したような生徒。
というのが表向きであって、実情はヒドい。
人と話せば、性格、人気、相手にとっての自分の印象などを冷静に分析し記憶する。

かといって一人でいれば、どうすれば今以上に人気を得られるか一日中考えてしまう始末だ。
昨日は学校で全校生徒の信頼を勝ち得る為の基本その一、鏡の前でニコリと笑う練習をしすぎて顔をつりそうになってしまった。
そんな訳で今日も相馬は信頼を勝ち得る為の基本その二である体力を鍛える為に、五時半に起床しランニングに出た。
「現在時刻が５時４５分だから……終わりは６時３０分だな。よし、そんじゃよーい始めっと」
タッタッタッタ
小刻みに規則正しい音がまだ静かな住宅街にこだまする。
走っていても集中していなければ成果は半減だ。
相馬はだんだんと集中し無心になりながら走って行くのだった。
事は四十分程走りもうそろそろ終わりというときに起こった。
曲り角から凄まじいスピードで何かが飛び出して来たのだ。
「避けてっっ」
という女の子らしき声が聞こえた。
相馬は止まっている時間はないと直感的に悟り、地面についていた左足で思い切り地面をたたく。
そして右足で体を支える事をせづ、ほぼ転ぶようにして右に避けた。
これで衝突は回避出来たように思われた、だがその直後ガッという音を相馬は聞いた。
目の前の少女が転んだのである。
それも態々相馬が避けた右方向へ。

直後。
ゴリッ
という鈍い音が響き二人は正面衝突した。
「……痛たたたた……って……」
目の前に女の子が居た。
足を抑えているので、どうやら足を傷めたらしい。
「ごめん、大丈夫？　大丈夫そうなら家に送って行くけど……救急車呼んだ方が良いかな？」
「……助……けて」
「うん、分かった……え？」
助けるって何を？　と言おうとしてやめた。
少女は泣いていた。
「……助けて…助けて助けてよぉー！！」
とても悲しそうに、大粒の涙をポロポロと流し、相馬を両手でたたきながら彼女はそんな事を言って来た。
相馬はとても困惑し、しかし冷静にどうすれば良いかを考えながら誠心誠意丁寧に、少女を諭すようにゆっくりと謝った。
「ごめん。ぶつかって悪かった。お詫びに何でもするよ。俺は何を助ければ良いかな？」
「……ごめん……私が転んだから……私のせいでぶつかったてわかってる。……自業自得だね……逃げようとなんてするから……私なんて一生あそこにいればいいって神様が言ってるのかなぁ……」

そう言って彼女は自嘲的に、とても悲しそうに笑った。
なにか言わなければ、と思い、必死に言葉を探した。

「ごめん。あんまり分からないけど、俺に出来きる事な……」
「やっぱり嫌だ！！　イヤだイヤだイヤだぁっ！！　帰りたくない！！」

もうなにがなんだか分からない。
相馬がもう諦めて立ち去ろうと思ったとき、ダダダダダと荒々しい足音と共に六人程黒いスーツをピチッと着こみサングラスをかけた集団がやって来た。
同時に少女の顔が明らかに恐怖に歪んだ。
黒スーツの一団はこちらを一瞥すると、しゃがみ込んで目線を少女に合わせ笑顔で信じられない事を言い放った。

「帰るぞ、モルモット」

相馬は自分でも気ずかぬ内に男を殴り、少女を抱えて逃走していた。

一話　：　出会い頭の急展開（後書き）

感想やアドバイスなど待ってます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1642ba/

彼と彼女に祝福を

2012年1月4日03時46分発行